

歴史

郷土史を読む

福島市の北、約二十キロの所に徳江という村がある。この徳江村の東のはずれに小さな観音堂があり、ご本尊は来連観音と呼ばれ、三十三年に一度の御開帳という秘仏が祀^{まつ}られている。私は全くの偶然から、この観音にまつわる縁起を古文書で読む機会を得た。

縁起は云う。

「徳江村の観音の建立は天長三年（八二六）である。当時紀州野山においてになった弘法大師に、夢のお告げがあった。それは、『奥州伊達郡、阿舞熊川（阿武隈川）の西に国見坂という坂があり、この坂は出羽・奥州の中でも険しい山路である。その地に正観音像をつくり、鬼門に向けてお堂を建立し、北方の悪魔を祓うべし。』という内容であった。そこで、国見坂と阿武隈川の間に関音堂を建て、数十の建物も建てた。そのおりそこには、空海上人弘法大師が秘法を封じ込められた御墨箱、法華の八軸、建立時の国主の赦免帳があった。

その後、平穩に過ぎた観音寺であったが、康平五年（一〇六二）「前九年の役」で源頼義公が戦の前にこの観音に祈願された。頼義公は安倍貞任を国見坂でお討ちになった時、願いが成就されたのでこの

観音に真羽太まはたの御矢を一本奉った。

さらに、文治五年（一一八九）源頼朝公が藤原泰衡公をお討ちになった時、泰衡公はこの地を要の地とみて、国見坂一帯に大木戸堀を造り、阿武隈川の水を引き入れた。そして、西木戸を太郎国衡を大将として国見坂を守らせた。

一方、頼朝公の先鋒は、畠山次郎重忠であつたが、重忠はこれを破ることが出来ず、日数を重ねるばかりであつた。この時、重忠配下の三浦平六景村という者が、夜陰に紛れて東に向かい阿武隈川の川岸に沿って忍んでいった。すると、烏帽子に白鳥を載せた老人が現れ、『私はこの地の観音の権化である。この川は奥州で最も渡渉に難しい河である。この河水を渡って東から攻めるのは難しい。ここから西に向かつて国見坂の裏山に鳥取というところが在るので、そこを通過して攻めれば勝利は疑いない。』と告げた。景村は権化のお告げに従って鳥取を探していくと、国衡の館の裏へ廻ることが出来た。これによって、国衡は利を失い敗北し、重忠は大木戸を破ることができ、その後、泰衡が滅亡した。この話に頼朝公は心を動かされ、この観音へお立ち寄りになった。自分をここまで連れ導いた法力を感じ、改めて「来連観音」とご自身で名をつけられた。」これが縁起

の要旨である。

私はこの縁起古文書を読み終えたあと、徳江村を訪ねた。当時の伽藍は慶長年間の阿武隈川の大氾濫で、今は何一つ面影はなかった。ただ、当時を偲ばせるものとしては、阿武隈川から水を引いたと思われる空堀の深い環濠の跡がはっきりと残っていた。さらに、処々かわらけの畑の隅に瓦筈が寄せ集められていた。記録によるとこの地には立派な寺院と五重の塔、周辺には三十軒ほどの僧坊があったと記されているが、洪水の折水は五重の塔の三層まで押し寄せ、建物の多くは流されてしまったと記されている。瓦筈の量を見れば信じられないことでもないが、絵はもちろん配置図さえ無い現在では手がかりは全くなく、想像の域は出ないものの、当時の阿武隈川は流れに任せていて大雨の度に流れが変わっていたと思われる。その一つに現在の福島市の中央に位置する信夫山が大水の際、信夫平野の中にぽつりと一つだけ見えたという話も伝わっている。さらに、福島市は渡利町、東浜町、上浜町、腰浜町、新浜町、浜田町、上河原町、河原下町、古川町、前河原町、中河原町、中大巻町、下大巻町、小舟前町、中窪町、丸滝町、堀川町、松河原町、三河町と川辺に由来する地名が多い。あざ字には町のつかないところもある）当時は河川工事

も十分に行われなかったろうから、大雨の出水は流れに任せるしかなかったのであろう。

大雨といえば私は一度だけ白河市で恐怖を味わったことがある。一時間雨量百ミリを超えた時である。丁度、出勤時間帯であったが、阿武隈川の上流は今までに経験したことのない増水で、川幅を広くする工事を終えていた河川も増水し、橋桁まで水が押し寄せた。何とか車で職場へは着いたものの雨水はたちまち車のタイヤの全体を埋め、私は駐車場の車から降りることが出来なくなった。見ると、雨は屋根の水を呑み切れずに直接地面に落下している。雨粒の大きさはこれまでに見たこともなく、視界は利かず、四面を打つ音はすべての音を欠き消した。十メートル先には玄関があるが、そこへもたどり着けない。玄関で傘を持った用務員さんが気をもんでいるが、お互いにどうしようもないのだ。一時間ほどで雨は峠を越えたが、幸いに生徒も職員にも怪我等はなかった。しかし、公私の物的損害は大きな傷跡として残った。老子は「水より柔弱なるはなし、されど水より強きものはなし」といったが、古人は短い言葉で真実を表現しているのだと実感した。また、中国の俚諺に「河水を治めるものは国を治める」という言葉も残っているが、福島市の治水は昔か

ら人々の悩みの種であったに違いない。すると、阿武隈川河畔の徳江村に大水害があり仏閣を流し去ったとしても不思議な話ではない。古文書の途中の読みまでは、勝利した鎌倉方への賞賛と洪水で流された伽藍建立の寄進要請ではないかと読み進めたが、この地に洪水のあった年号は古文書と一致していた。さらにこの古文書を深読みすると、中世後期から近世初期のころ、この一帯は伊達藩と上杉藩の国境にあたり、両藩の角逐がしばしばあったと伝えられている。すると、この記録は次代を跨ぎ、悲劇の狭間で喘いでいた信仰深い僧の手によって書かれた聞き書きかも知れないとも考えられた。

たまたま畑仕事をしていたおばあさんに瓦笥のことを聴くと「このあたりの畑は鍬の刃落としといって、作物の作りにくい処なんだわ」という返事が返って来た。よく見ると藤田町の山側は一面の田んぼなのに、徳江村は水利の便は悪くないのに水田が少ない。この瓦笥は昔物語を歴史に残すための形見なのかも知れないと思ったことであった。今でも来連寺の東側にその同じ阿武隈川が流れている。初夏の頃で、村落は田畑のあちこちに桃の花を点在させ、栄枯の歴史をひっそりと包んで無言であった。柔らかな風は何事もなかったように穏やかに私の胸の中を吹き過ぎていった。